

2026年度 入学試験問題

国語

〔注意〕

- 1 この問題冊子は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 解答用紙は、問題冊子にはさんであります。試験開始の合図があつたら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、受験番号をマークすること。
- 3 解答は全て解答用紙に記入しなさい。
* 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」（ ）などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 4 印刷が不鮮明な場合は申し出ること。
- 5 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
- 6 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰ること。

一 次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、古代の塑像が発見される。
- 2、溪流で釣りを楽しむ。
- 3、将来を嘱望される人材。
- 4、約束を履行する。
- 5、委員会に諮る。
- 6、中世にハントを拡大した国。
- 7、ジヨウキを逸した行動。
- 8、センサイな感性を大切にする。
- 9、ココウの歌人。
- 10、発育をヨクセイする。

二 次の――線の言葉が正しく使われているものはA、そうでないものはBとして、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、話がよいよ佳境にわたり、多くの読者を獲得した。
- イ、彼の天衣無縫な態度は多くの人に愛された。
- ウ、万難を排して人々を守った偉人として称えられる人物。
- エ、魚心あれば水心で、徐々に必要なものが増えてきた。
- オ、木に竹を接ぐような、人々の意表を突いた説明が大いに評価された。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、一部省略した箇所があります。

都立東新宿高校定時制には、様々な事情を抱えた生徒たちが通ってくる。その中であって、苦勞して町工場を興し、身を立ててきた長嶺省造は、人一倍勉強熱心で、常に教員を質問攻めにしていて、そんな日常に辟易した柳田岳人はじめ生徒たちは、嫌悪感をあらわにし、授業をボイコットする事態になりつつあった。

四限目が始まるチャイムと同時に、岳人が^①仏頂面^{注2}で教室に入ってきた。数分前に姿を見せた麻衣は、いつもの席でスマホをいじっている。^{注1}藤竹が個別に声をかけ、今日の「総合」の授業だけは出席するようにと説得したらしい。おかげで元不登校組の生徒たちもほほそろっており、教室は以前の人数に戻った。

教卓に両手をついた藤竹が、普段どおりの表情で告げる。

「今日から数回、この『総合』の時間は『職業の選択と自己実現』というテーマでやりたいと思っています。まずは考えるヒントとして、少し昔の話をしたい。皆さんは、集団就職というのを知っていますか？」

案の定、生徒たちからは何の反応もない。藤竹はそのあらましを説明し、続けた。

「実は、その集団就職の経験者が、このクラスにいます。長嶺さんです。今日は長嶺さんに、ご自身の体験をお話しいただこうと思うんです」

「おい、何だよそれ」岳人が顔をしかめる。「就職の話をするっていうから来たんだぞ。ジジイの話なんか聞いてられっかよ」

藤竹は「長嶺さん、お願いします」と省造を教壇へとうながすと、自身は教室の後ろまで行つて、席を立とうとしていた岳人をまた座らせた。

省造は教卓の後ろに立ち、生徒たちを見回した。どの視線も、やはり冷ややかだ。

これを引き受けると思ったのは、二日前。江美子と病室で「親ガチャ」の話をしてからのことだ。藤竹には一つだけ、条件をつけた。話す内容はこちらに任せてもらうということだ。

後ろの壁際に立った藤竹が、うなずきかけてくる。手の置きどころがわからないので、両腕を真つすぐ下ろしたまま、口を開いた。

「集団就職というのは、専用の列車に乗せられて行くわけです。昭和三十九年三月、私も福島湯本駅から、上野行きの汽車に乗り込みました。家族だけでなく、中学の同級生も大勢見送りに来ていてね。みんな、高校へ進む者たちですよ。私の隣に座っていた男子は、うつむいて悔し涙を流しとりました。『あいつら、勉強なんか嫌いだと言ってたじゃねえか。俺はもっと勉強したいのに、なんで』と。私は泣くどころか、彼らにらみつけていましたよ。『お前らには絶対に負けん』と、心の中で叫びながらね」

教室はAを打ったように静まり返ったが、生徒たちの表情からはまだ何も読み取れない。

「実際、私は負けなかった。働いて働いて、最後には自分の工場を持つまでになった。だから私は、今もこう思っている。学歴などなくとも、十分成功できる。あえて高校へ行く必要などない」

「はあ？ 何言ってるんだこいつ」岳人が呆れた声を上げた。その後ろで腕組みをした藤竹も、眉を持ち上げている。

②「そんな考えの私の半生など、君たちも聞きたくないだろうと思う。だから、先生には悪いが、今日は違う話をしたい。私の妻、江美子の話です」

それを聞いた藤竹は、眼鏡に手をやり、うつすら微笑んだ。

「妻は、青森のさびれた漁村で生まれました。父親は漁師で、若い頃は大変な働き者だったのに、戦争から帰ってくると、漁にも出ずに酒ばかり飲むようになったそうです。今になって思えば、戦争で何か心に傷を負ったのだらうと、妻は言っていますがね。とにかく、働かない父親に代わって、妻が家計を支えなくてはならなくなった。両親に加えて祖母、幼い弟、妹がいましたから。中学卒業後、私と時を同じくして集団就職で上京したんです」

(中略)

省造はそこでいったん口を閉じ、息を整えてから続ける。

「妻は勉強が好きで、高校へ行きたいという気持ちも人一倍強かった。当時私も蒲田で働いていましたが、あの辺の工員の中には、定時制高校に行っている者も結構いたんです。だが妻の職場では、遅番の仕事が夜にかかるので通えない。昼休みなんかは街角のベンチで教科書を開いている作業着姿の若者を見かけると、うらやましくて仕方がなかったと言っていました」

(中略)

「妻は今、入院しています。退院はいつになるかわからない」

省造は一つ大きく息をつき、視線を宙にやって静かに言った。

「私はね、後悔しているんです。家でも工場でも、妻に長年無理をさせすぎた。私はもともとヘビースモーカーでね。妻にもずいぶん煙を吸わせてしまった。たばこなど、もっと早くやめるべきだった。この定時制へ来たくて来たくてたまらなかったのは、私じゃなくて妻なんです。私ともう少し妻の体を気遣っていてやれば、あれは今頃、ここに――」

危うく声が震えそうになり、すぐに唇を結ぶ。

「じゃあさ」岳人の声が飛んできた。「あんた、奥さんの代わりに来てんのかよ」

省造は何も答えられない。

「責めてんじゃねーよ。訊いてんだ。あんたもしかして、

B

? だからいつも必死にノートとって、教師を質問攻めにし

て」

「私の話は——」^③「どうにか唇を動かした。」「以上です」

「ありがとうございます」藤竹が言つて、こちらへやってくる。「私にとつても、大変勉強になるお話でした」

*

週が明けると、教室は何事もなかったかのように平常に戻った。

前列に陣取る面々は熱心にノートを取り、元不登校組は相変わらずぼんやりとただ座っている。麻衣はスマホをいじり続け、客から電話がかつてくるたびに廊下に出ていく。

省造自身は少し態度を改めた。授業中の質問をなるべく控えて、休み時間や放課後にまとめて訊くようにしているのだ。その場で一つか二つ質問したとしても、背後に冷たい視線を感じることはない。三つ続けると岳人の舌打ちが聞こえてくるので、振り返って「これで最後だよ」とひと言かける。

放課後、また藤竹に呼び出された。物理準備室を訪ねると、藤竹が一人、奥の机で論文らしきものを読んでいる。

「今日は科学部はいんですか」省造は丸椅子に腰掛けて訊いた。

「ええ。クレーター実験は中断中でしてね。でも、長嶺さんのおかげで、また進めることができそうです」

「何のことだ。私は何もしとらんよ」

「実は今日の夕方、奥様から私に電話がありましたね」

「電話？　うちのが先生に？」

「それから、これを」藤竹は紙を一枚差し出した。「病院のコンビニからファックスで送ってくださいました」

それは、省造が病室で手描きした、鉄球の発射装置の図面だった。あくまで暇つぶしに描いたもので、これが何かは妻にも説明したが、落書きなので捨てていいと伝えたはずだ。

(中略)

「しかし——」何が起きているのか、本当にわからない。「なんで妻はこれを先生に。私はそんなこと、頼んでいない」

④「私は頼まれたんです」藤竹が C を細める。「あなたを科学部に入れてやってほしいと、江美子さんから。もっとあなた自身に、高校生活を楽しんでほしいから、と」

「私を楽しむ？　いや、だから私は……」

「江美子さんは、あなたが以前、定時制高校の案内パンフレットを取り寄せていたことを、ご存じでしたよ」

「そうなのか……」

それは、もう十五年ほど前のことだ。福島之母が亡くなる直前、「省造、父ちゃんさ恨んではだめだぞい」と言って、遺言がわりに初めて教えてくれた。父がなぜヤマで孤立してまで、組合運動にもストライキにも加わらなかったのか。

それはすべて、省造と妹のためであった。高等小学校しか出ていないために炭鉱で働くしかなかった父は、子どもたちをどうしても高校へ行かせたかったのだ。そのためには一銭でも多く稼がなければならない。父は月に一日休むことも惜しみ、組合もストもお構いなしに、賃金の高い危険な現場を選んで入っていた。そして、帰らぬ人となってしまった。

それを知って以来、父に対して抱いていた怒りは、言いようのない申しわけなさに変わった。それだけではない。父が命がけで自分たちに望んだ高校というところを、このまま知らずに死んでいいのかと考えるようになった。

妻には黙って定時制のパンフレットを取り寄せ、六十や七十の人間でも受け入れてもらえることを知った。もうしゃかりきに働く必要もないし、ちやうど江美子も高校のことを口に始めている。数年したら工場の仕事を減らして、妻と二人で通うのもいい。などと思っていた矢先に、彼女のじん肺(注3)ばいが発症した。自分だけが高校へ通うなどということは、当然ながら考えられなかった。

藤竹が穏やかな声で言う。「授業で習ってきたことを家で教えてほしい。そう言い出したのは、奥様のほうだそうですね。もしかしたら、そんな風に頼めばあなたも気兼ねなく定時制に通えるとお思いになったのかもしれない」

省造は目を閉じて、^⑤静かに息をついた。

それでも言わないと、あなた、高校へ行くと言わなかったでしょ——。まぶたの裏で、ベッドの上の妻が微笑んだ。

「江美子さんは、こうもおっしゃっていました。『病室でも科学部の話ばかりしているから、本当はすごく仲間に入りたいんだと思います。宇宙や地球にはそこまで興味はないかもしれないけれど、何か作ってくれと頼まれたら、お金にならない仕事でも腕まくりして張り切っちゃう人だから』と」

目を開き、藤竹を見据えて質す。

「あんたも、私の^⑥そんな性格を、最初から見抜いていたんだろう？」

「どうしてそう思われるんです？」

手の中の図面を突き返して言う。

「この程度の装置、あんたが思いつかないとは思えんからだよ」

藤竹は何も答えず、わずかに首を傾けて口角を上げる。その表情を見つめ、省造は小さく笑って言った。

「食えんな、あんたは。^⑦妻より食えん」

(注1) 「麻衣」……………「省造」のクラスメイト。

(注2) 「藤竹」……………都立東新宿高校の教員。東都大学大学院理学研究科に無給の学術研究員として通ってもいる。定時制高校に科学部を立ち上げ、顧問として「岳人」や「省造」をスカウトしている。

(注3) 「じん肺」……………粉じんの発生する職場で働く者が、長期間にわたって吸い込むことで、肺の組織が硬く線維化する病気。

問 一、——線①「仏頂面」に関連する内容として適当でないものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア、不機嫌 イ、不安 ウ、不満 エ、不審 オ、不憫^{ふびん} カ、不服

問 二、

A	・	C
---	---	---

にあてはまる語の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、A—不意	C—口
イ、A—胸	C—肩
ウ、A—先手	C—眉
エ、A—水	C—目

問 三、——線②「そんな考え」とは、どのような「考え」のことですか。そのことを説明した部分を文章中からひと続きの二文で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問 四、
B にあてはまる言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア、奥さんの手前いい顔したいだけなんじゃねえのか
イ、奥さんの分までがんばってるだけなんじゃねえのか
ウ、奥さんより勉強がわかってないんじゃねえのか
エ、奥さんの前で授業を再現してるんじゃねえのか

問 五、——線③「どうにか唇を動かした」とありますが、このときの「省造」の状態として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、年の離れた定時制の生徒に、自分の心の内を見透かされたような気がして、激しく動揺している。
イ、意を決して初めて打ち明けた妻の過去を踏みにじられたような気がして、激しく憤っている。
ウ、人前で話すことが決して得意ではないのに、無理に話したことで、返す言葉がなくなっている。
エ、苦労の多かった半生を振り返ったものの、若者には到底理解されまいと、虚しい思いに陥っている。

問 六、——線④「私は頼まれたんです」とありますが、「江美子」はなぜ「藤竹」にこのような頼みごとをしたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、不本意ながら学窓に集えなかった自分にとっては、「省造」の話が、行き止まりの未来を忘れ得る唯一の楽しみになっていたから。
イ、亡き義父の思いを胸に、定時制高校に通うことは、「省造」にとってなものにもかえがたい老後の経験だと確信していたから。
ウ、思わぬ病に見舞われた自分の介護がもとで、長年の自分の夢を諦めた「省造」に対して、肩身が狭い思いにとらわれていたから。
エ、「省造」との日々の会話から、学校の仲間とうまく関係性を築けていないことを感じ取り、何とか修復してもらいたかったから。

問 七、——線⑤「静かに息をついた」とありますが、このときの「省造」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、どこまでも妻の思いをくみ取り、尊重していたはずの自分が、思いも寄らない対応を妻からされ、心から脱帽している。
- イ、どこまでも妻を思いやり、守るべき存在だったはずの自分が、逆に妻から温情をかけられていたと知り、無様だと自戒している。
- ウ、どこまでも夫の性質を知り尽くし、夫に自然な行動を促すように仕向けた妻のさりげないふるまいに、頭が上がらないと感じている。
- エ、どこまでも夫を気遣い、たてようとする妻のけなげな一面に心うたれ、これではとても顔向けできないと心の底から反省している。

問 八、——線⑥「そんな性格」とありますが、この文章からはつきりと読み取れる「省造」の性格として適当なものを次から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、一度心に決めたことについては最後まで全うしようとする、強い意志の持ち主。
- イ、年を重ねても、常に知的好奇心を失うことのない、感受性豊かな性格。
- ウ、いったんやると決めたら、損得抜きで、惜しまず力を注ぐきつぷのいい性格。
- エ、年長者として貢献できる役割を常に模索している利他の精神に満ち溢れた性格。
- オ、集団と交わるには時間を要するが、いったん水を向けると途端に勢いづく性格。
- カ、一代で自分の工場を構えた自負から、自分の着想に絶対の自信を持っている性格。

問九、――線⑦「妻より食えん」について、次の各問いに答えなさい。

1、意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、妻よりたちが悪いということ。

イ、妻より意地が悪いということ。

ウ、妻より油断がならないということ。

エ、妻より信頼がおけないということ。

2、「省造」は、なぜこの言葉を発したのですか。そのことを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、十五字以上二十字以内で考えて答えなさい。

藤竹が、発射装置のアイデアを引き合いに、

十五字以上二十字以内

ことに気づいたから。

問十、文章全体から読み取れる内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「省造」は、自分の行動が世代の異なる生徒にも理解しやすくなるよう計らってくれた「藤竹」には、内心、感謝の念を抱いている。

イ、「江美子」は、若い頃、学問への強い憧^{どうけい}憬を持っていたが、病のためにやむなく断念し、心ならずも身を引く形をとらざるをえなかった。

ウ、「藤竹」は、「省造」にあえて昔の「江美子」の話をしてもらうことで、周囲との間に入りつつあった亀裂が自ずから解消するよう意図的に仕向けた。

エ、「岳人」は、「省造」の傍若無人な行動に懸念を抱いていたが、授業態度に変化が見られたことを機に、怒りの矛先を「省造」に向けることはなくなった。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、一部省略した箇所があります。

右脳は、感性やイメージを担当している半球で、音楽や絵画に感応するときのような、ことばにならない非言語的な情報、記号にならないアナログ情報を認識していると言われている。非言語的、非記号的であるため、意識とは直結していないとされ、^①劣位半球とも呼ばれる。

一方、左脳は、意識に直結した処理を一手に引き受けている半球だ。情報を記号化し、演算し、時間軸に積み上げて合理的に処理している。たとえば会話は、記号化されたコトバの演算だ。会話において、コトバを紡ぎだしているのはこちらの半球なのである。意識に直結した入出力を担っているので、大変よく働いているように見えて、^②優位半球と呼ばれている。

左脳が破壊されると、破壊された箇所に応じて言語障害が生じることは、既によく知られた事実である。破壊された箇所が同じなら、同じ障害が現れる。右脳の場合は、破損箇所と障害の関係があいまいで、左脳のように明確には機能箇所が特定できない。このため、左脳は言語能力に直接的に寄与している半球とされ、言語優位脳あるいは言語脳とも呼ばれている。

しかし、だからといって、^③右脳がいつさい言語能力に関与していないわけではない。

ヒトの言語能力には、「話す」「書く」という「ことばを紡ぎだす能力」と、「文章を読解する」「話し言葉を理解する」という「ことばを認識する能力」とがある。左脳は、これらのすべての能力を有し、右脳に対してすべてを優先的に機能させている。

一方、右脳には、話す、書くということばを紡ぎだす能力はない。

A

、文章読解と対話理解が可能であること、つまりことばを認識する側の能力があることは確かめられている。

すなわち、左脳は言語を意識的に扱う脳であり、ことばを紡ぎだすことも認識することも両方とも優先的に行っている。右脳は、左脳の陰に隠れているが、ことばの認識に関しては、何らかの能力を有しているのである。右脳が、音楽や美術などの記号化できない要素に感応する感性の半球であることを勘案すれば、ことばには、意識的に扱う意味とはまた別の、感性の認識が伴っているということになる。

「感じる脳半球（右脳）」のことを「潜在脳」とも呼ぶ。左脳が、記号化されたコトバ（意味）を認識・演算している陰で、右脳は、この処理とは別の系としてことばを認識し、密かに反応している。

右脳で起こっていることは、脳の持ち主の顕在意識（左脳の処理空間）に、そのままのかたちでは上がってこない。そのため私たちは、この「脳の秘め事」に普段は気付かず暮らしている。「ファンタジー」のふんわりした放射拡散イメージは、右脳の持ち主も意識してはいないのだ。しかし、その音から浮かぶ「ふんわり」というイメージは潜在脳には浮かんでいるのである。

だからこそ、^④ファンタジーに代わる日本語は定着しなかった。大多数の人にとっては、空想大河物語という文学スタイルを指すファンタジー

ということばの響きは、その意味、内容にマッチしていた。気持ちよくて、知らず知らずに使ってしまう響きを持っていたのである。

顕在脳（左脳）が認識しないのに、潜在脳が密かに認識しているもの。それらはやがて、無意識の行動に影響を与える。それも、個人というより大衆という大きな単位に影響を与えるのである。

この世の現象、すなわち脳の入力情報には、そのような類のものがある。ことばの音は、その潜在脳認識を喚起する、最も有力な入力情報である。

したがって、「ことばの音が潜在脳に描くイメージ」とは、右脳の感応空間に起こる、密かな認識そのものを指す。顕在意識で理解していただくために、あえて「イメージ」ということばを使い、形容詞や状態を表すことば（イメージ語）を駆使して表現しているが、本来は、記号的なコトバでは表現しきれない、五感のすべてを駆使して感じ取るべき「^⑤脳の秘め事」なのだ。

（中略）

このような、ことばの音から潜在脳に浮かぶイメージを、サブリミナル・インプレッションと呼ぶことにする。subliminal（意識下、潜在意識）とimpression（印象）を合体させた私の造語である。

実は、ことばの音単体のサブリミナル・インプレッションは、認知科学で「クオリア」と呼ばれるものに相当する。子音、母音の組み合わせで単語が構成されるのと同様に、それぞれの音のクオリアが組み合わさってひとつのサブリミナル・インプレッションは形成される。

クオリアとは、五感を通じて脳に入力される知覚情報が脳に描く印象の質のことである。たとえば、ピアノのミの音を聴いて感じる印象の質や、ヴァイオリンのG線の音を聴いて感じる印象の質、トマトの赤を見たときの印象の質、レモンの匂い^{にお}を嗅いだときの印象の質など、聴覚や視覚から脳に浮かぶイメージのこと、といえいいだろうか（かなり大雑把^{おおざっぱ}ですが）。

認識の最初、非常に主観的な領域で起こるクオリアは、ことばで正確に表すのは難しい。たとえば、和音のドミソは明るく前向きな感じ、レファラは、ちょっと気だるい心地よさ……というのは、私の主観で捉えた二つの和音のクオリアである。ドミソはビビッド・トーン（鮮やかな色の組み合わせ）、レファラはパール・トーン（淡灰色系の色重ね）と表現する人もいる。ドミソは安心、レファラは不安、と言う人もいる。

このように、同じ物理的特質（音程などは周波数で客観表現できる）を、Bという「鏡」に映したのがクオリアである。おそらく、ドミソとレファラの違いは、多くの人間が同じように感じているのだが、その違いを「総括的に正しく表現しなさい」と言われると難しい。なのに、「あなたはドミソのイメージで、彼女はレファラのイメージなんだ。彼女の方が放っておけない」というセリフ、なんとなく、納得しませんか？

「トマト・レッドの鮮やかさ」、「レモン・フレーバーの鮮烈さ」。ここにおける、鮮やかさも鮮烈さも、抽象度の高いあいまいな形容詞であり、トマトやレモンのすべてを語っているわけではないのだが、トマトの赤やレモンの香りを知っている人間同士なら、「うん、そうそう」と言える

^⑥ 共通の何かがある。

このような、明文化（総括表現）はしにくいが、「ああ、あの感じ」と共感できるイメージの素（印象の質、意識の質）がクオリアなのである。そして、楽器の音や色や匂いと同じように、子音Hを聴いて感じる印象の質、母音Oを聴いて感じる印象の質もクオリアなのであるというのが、私の説の前提である。

たとえば、「星」ということをささやかれたとき、私たちの脳には、子音Hを聴いたときのクオリア、母音Oを聴いたときのクオリア、子音SHを聴いたときのクオリア、母音iを聴いたときのクオリアという、四つのクオリアすなわち印象の質が生じている。

拍Ho↓SHiは、それぞれ子音+母音の二つのクオリアの響き合いだ。音楽でいえば和音にあたる。Ho↓SHiの二拍は、明らかに時系列の流れを作っており、音楽で言えばメロディにあたる。

ピアノとヴァイオリンの単音（のクオリア）がハーモニーを作り、その時系列の流れがメロディを作り、結果、美しいアンサンブル音楽として私たちの心を打つように、ことばは、ことばの音単体のクオリアのハーモニーとメロディで出来上がる、美しい複合印象なのである。クオリア論からいえば、ことばはこの世で一番短い音楽なのだ。

C、サブリミナル・インプレッションを正確に表現するなら、「ことばの音のクオリアによる、音楽に似た複合演算の結果もたらされる脳のイメージ」である、と言い換えることも出来る。

もちろん、サブリミナル・インプレッションを誘発する因子は、音だけではない。前述の通り、書き言葉であれば、文字の色・かたち、一行の文字数、各段落の文字量、縦書きか横書きなども、それぞれに印象の質⇨クオリアを持つ。話し言葉であれば、話し手の声や抑揚にも印象の質⇨クオリアが存在する。

商用のことばであれば、このようなビジュアルや音声のクオリアを無視することは出来ないだろう。音楽の奏者が美しいのかそうでないのか、楽器が名器なのかそうでないのかもまた、音楽の価値（演奏会のチケット代）に影響が出るのと同じように。

とはいえ、奏者や楽器は、モーツァルトやバッハの曲の本質を決定するものではない。誰が演奏しても、モーツァルトは饒舌で情緒に溢れているし、バッハは厳格にして荘厳である。

先に述べたように、ことばの音のサブリミナル・インプレッションは音楽そのものの、すなわち楽譜に相当する。

したがって、ことばの音がことばの印象のすべてであるとは言わないが、その本質を見極めるのには十分であると、私は確信している。ましてや、長く使われることばであれば、ときどきの話し手や文字の印象の違いなど問題にならない。

（黒川 伊保子「怪獣の名はなぜガグゲゴなのか」より）

問 一、——線①「劣位半球」・②「優位半球」とありますが、次のア・エのうち、「劣位半球」について書かれているものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア、料理の香りが鼻腔をくすぐった瞬間、その料理と一緒に食べた人の笑顔が脳裏をよぎった。

イ、ラジオから流れる音声言語を理解した。

ウ、小説の所々に掲載された挿し絵が、小説の印象を鮮明にする。

エ、文語文を理解するのは、かなり厳しい。

問 二、——線③「右脳がいつさい言語能力に関与していないわけではない」とありますが、そういえるのはなぜですか。文章中から二十六字で探し、「くから。」に続く形で最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問 三、

A

・

C

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、なぜなら イ、したがって ウ、それとも エ、しかし

問 四、——線④「ファンタジーに代わる日本語は定着しなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定の字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

音から浮かぶ「ふんわり」という

1、八字

 が

2、三字

 にマッチしなかったから。

問 五、——線⑤「脳の秘め事」とありますが、これは私たちにどのような形で影響を及ぼしますか。二十字以内で説明しなさい。

問 六、

B

にあてはまる言葉を文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問 七、——線⑥「共通の何か」とありますが、それは何ですか。文章中から十五字で探し、抜き出して答えなさい。

問 八、四人の生徒がこの文章の内容について論じています。最も適当な論評をしているのは誰ですか。次から選び、記号で答えなさい。

ア、生徒A——優れた歌人や俳人は漢字と仮名のバランスを考えるといいです。それは、その概念や語彙を熟知していなくても、クオリアが念頭にあるからなのだと思います。

イ、生徒B——世界的な映画監督が、画面からは匂いなどしないのに流血の場面ではガソリンをまいて撮影したというのも、クオリアとことばの相関を意識したんだろうね。

ウ、生徒C——筆者の「ことばはこの世で一番短い音楽だから、音こそはことばの本質である」という論理の鋭さには、とっても驚かされました。

エ、生徒D——人間の体を音の共鳴体と考えて、物理的な効果をもたらすが「ことばの音」であるという論もオリジナリティーの高い発想だと感じたよ。

五 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

これも今は昔、多田満仲のもとに猛く悪しき郎等ありけり。物の命を殺すをもて業とす。野に出で、山に入りて鹿を狩り鳥を取りて、いささかの善根する事なし。ある時出でて狩する間、馬を馳せて鹿追ふ。矢をはげ、弓を引きて、鹿に随ひて走らせて行く道に寺ありけり。その前を過ぐる程に、きと^(注3) ① 見やりたれば、内に地藏立ち給へり。左の手をもちて弓を取り、右の手して笠を脱ぎて、いささか婦依の心をいたして馳せ過ぎにけり。

その後いくばくの年を経ずして、病つきて、日比よく苦しみ煩ひて、命絶えぬ。冥途に行き向ひて、閻魔の庁に召されぬ。見れば、多くの罪人、罪の軽重に随ひて打ちせため、罪せらるる事いといみじ。我が一生の ② 罪業を思ひ続けるに、涙落ちてせん方なし。

かかる程に、一人の僧出で来たりて、のたまはく、「汝を助けんと思ふなり。早く故郷に歸りて、罪を懺悔すべし」とのたまふ。僧に問ひ奉りて曰く、「これは誰の人の、 ③ かくは仰せらるるぞ」と。僧答へ給はく、「我は汝鹿を追うて寺の前を過ぎしに、寺の中にありて汝に見えし地藏菩薩なり。汝罪業深重なりといへども、いささか我に帰依の心の起りし ④ 功によりて、吾いま汝を助けんとするなり」とのたまふと思ひてよみがへりて後は、殺生を長く断ちて、地藏菩薩につかうまつりけり。

〔宇治拾遺物語〕より〕

(注1) 「多田満仲」……源満仲。

(注2) 「郎等」……武士の家来。

(注3) 「きと」……ちらりと。

(注4) 「冥途」……死者の魂が赴く世界。

(注5) 「閻魔の庁」……地獄の大王がいる庁舎。そこに落ちた者は、生前の所行の罪惡を調べられ、刑罰を決定される。

(注6) 「故郷」……人間界。

問 一、——線①「見やりたれば」の主語は誰ですか。文章中から一語で探し、抜き出して答えなさい。

問 二、——線②「罪業」とは端的にはどのようなことを指しますか。文章中から一語で探し、抜き出して答えなさい。

問 三、——線③「かく」の指している内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、僧は、罪人を助けたい気持ちは持っているが、しつかり罪の懺悔をしてからでないと認められないと言っている。

イ、僧は、罪人を助けたい気持ちを持っているが、生まれ故郷に戻って、心から改心した生活を送るべきだと思っている。

ウ、僧は、罪人を助けようと思っているが、現世に返り咲いた暁には、自らの悪行三昧^{あくざうさんまい}を悔い改めるべきだと思っている。

エ、僧は、罪人を助ける決意を固めたが、誰よりも閻魔大王に知られることを恐れ、秘密裡^{ひみつり}に事を進めたいと思っている。

問 四、——線④「功」とは具体的にどのようなことを指しますか。そのことを示した部分を文章中から一文で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問 五、この文章の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、多田満仲は、荒くれ者として名高く、人の命を奪うことをいとわない武将だった。

イ、罪人は、他の多くの罪人が厳しい罰を課されるのを目の当たりにし、恐怖で涙を流した。

ウ、閻魔大王は、罪人の数々の悪事に業を煮やし、もっと厳罰に処すべきだと考えていた。

エ、僧は、地藏菩薩の化身として現れ、生前垣間見た罪人の信仰心に、救いの手を差しのべた。

五

五	四	三	二	一

四

八	七	六	五	四	三	二	一
			2	1	C	A	

三

十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
	2	1							

二

オ	エ	ウ	イ	ア

一

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

五

問一

問二

問三

問四

問五

四

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

二

ア

イ

ウ

エ

オ

一

塑像

溪流

囑望

履行

諮（る）

6

1

7

2

8

3

9

4

10

5

ハント

ジョウキ

センサイ

ココウ

ヨクセイ

最初

最後

から。

2

1

(15)

20

10

ことに気づいたから。

1

2

10

20

15

10

15

2026年度

高等学校入学試験問題

〔国語〕

解答用紙（二月十三日）

注意事項

・解答は解答欄の枠内に濃くはつきりと記入して下さい。
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏名

受験番号

0:00:00
1:00:00
2:00:00
3:00:00
4:00:00
5:00:00
6:00:00
7:00:00
8:00:00
9:00:00

評価点

SN-P0447